

第47図 集落域西半遺構配置図 S=1/200



写真 68 弥生時代終末頃の川跡
集落域北側低湿地（南より）



写真 69 弥生時代終末頃の川跡
集落域北側低湿地（南より）



写真 70
多量に捨てられた土器
弥生時代終末頃集落域北側
低湿地（南東より）



写真 71
多量に捨てられた土器
弥生時代終末頃集落域南西
側低湿地（南東より）



写真 72
方形竪穴住居跡
弥生時代終末頃
ベッド状の高まりがある
(北より)

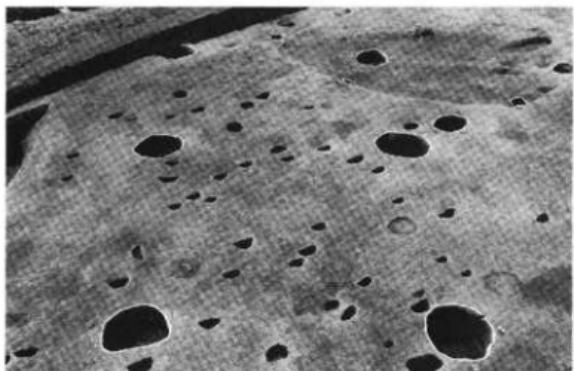


写真 73
掘立柱建物跡
弥生時代終末頃 (北より)



写真 74
張り出し付き
円形竪穴住居跡
弥生時代終末頃(南東より)

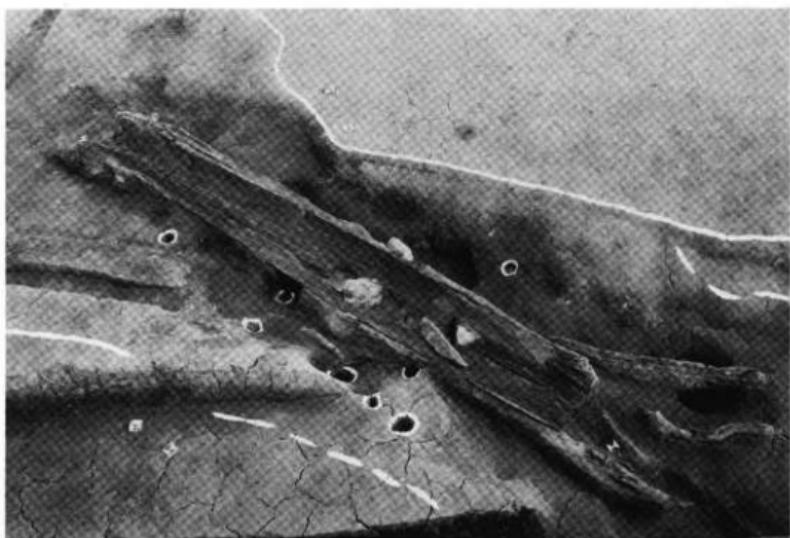


写真 75 木桶を使った水口跡(北西より)

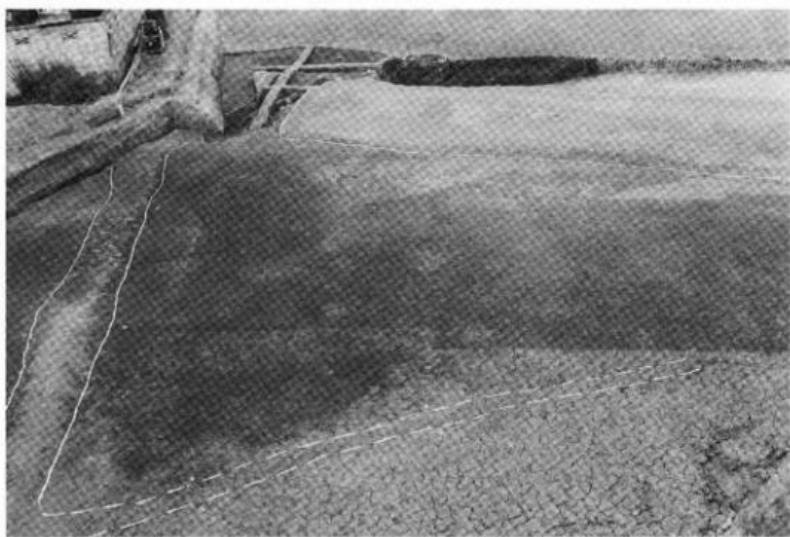


写真 76 大畔跡と木桶を使った水口跡(西より)



写真77 中世の水田跡(南より)



写真78 土塚墓(南より)



写真 79 鍋と杯(中世)(西より)

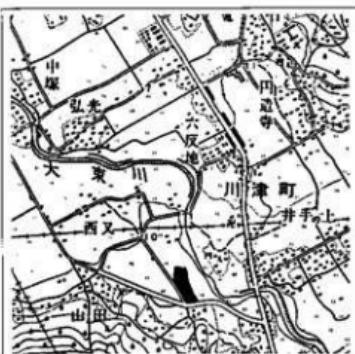


写真 80 作業風景
完形の土器 蘆生時代終末頃の完形の土器が出土している。

12. 川津一ノ又遺跡IV区

本遺跡は、飯野山と坂出平野の接点に位置する集落跡である。周囲を大東川及び飯野山北麓開析谷によって形成された旧河川で隔てられ、一ノ又遺跡III区と合わせて一集落を構成する。集落は弥生時代中期中葉、弥生時代後期終末～古墳時代初頭、古墳時代後期終末～平安時代前期に営まれている。平安時代後期以降は掘立柱建物1棟と現行水路の前身と思われる溝等を検出したのみで、基本的には水田域になつたものと思われる。

弥生時代中期の遺構は、溝3条（S D62・59-100・98）、竪穴住居3棟（S H004・005・21）、掘立柱建物



第46図 遺跡周辺地形図

1棟（S B01）他が、後期の遺構は溝2条（S D30・112）、竪穴住居20棟他が検出された。両時代ともに周囲の旧河川を利用する一種の環濠集落であったと推察される。中期の竪穴住居は微高地の西端、掘立柱建物は東端近くに点在する。これに対して後期の住居は切り合い、方向などから同時併存は2・3棟と思われるものの、環濠S D30の掘削に伴って微高地の西端部に偏在する傾向が見られ、興味深い。

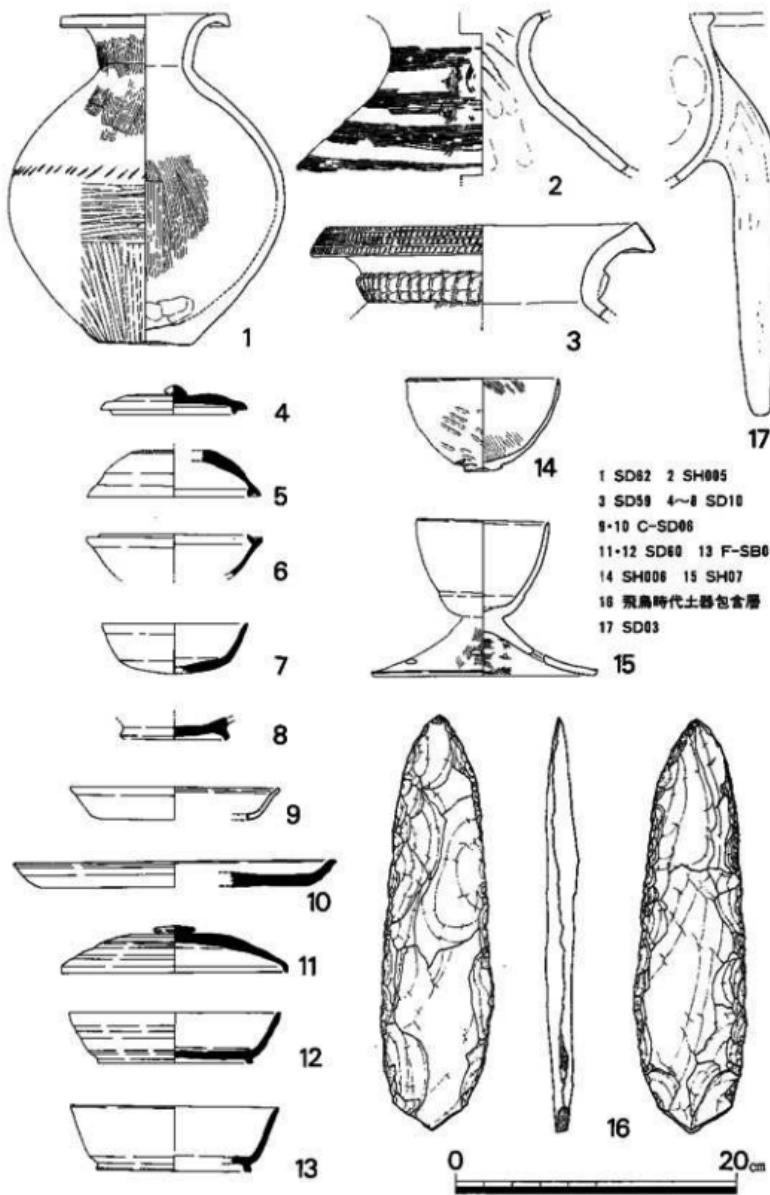
古墳後期終末～飛鳥時代の遺構は、溝5条（S D10・80-110・40-60-51-103-47-95-76）、竪穴住居3棟（S H03・04・11）、掘立柱建物8棟（併存は4棟以下）他が検出された。これらの住居は、微高地の北部の東西の低湿地を結ぶ基幹水路（S D10）の南北それぞれ20m以内に検出される。この時期の掘立柱建物の主軸はほぼ北西方向である。S D10は7世紀半ば頃、大量の土器、牛馬の骨とともに人為的に埋め戻された状況が埋没状況よりうかがえる。またS D80-110-95は出土遺物の大部分が磨滅をほとんど受けていない弥生土器であるにもかかわらず、最下層からも古墳後期終末期の須恵器杯等を出土する。S D112及び弥生中後期包含層を再掘削したものであり、その土を両側に土手状に盛っていたものを再度埋め戻したと考えるが、検討の余地を残す。S D80-110は古墳後期終末に埋没し、その機能はS D40-60に受け継がれる。

奈良時代には、溝3条（S D40-60-74・75）、掘立柱建物10棟（併存は10棟以下）が存在する。これらの住居は主軸方位を北に変えるものの、埋め戻されたS D10の南北20m以内に収まり、古墳後期終末期以降の連續性がうかがえる。基幹水路は、古墳後期終末以来の微高地を斜めに走る溝1条（S D40-60）を継続して利用するとともに、それに並走する溝2条を加える。内1条（S D75）は幅2m程の畦（道）の下の木樋を経て南部低湿地につながる。この畦（道）は、微高地には地山削り出しによって、東および南西（III区南端地区）の低湿地部は盛土によって形成され

ている。南西部に確認された飯野山北麓の東山田遺跡の集落と東部に存在すると思われる集落とを結ぶ道であることが容易に推察しうる。南部低湿地を溜池として利用し、その土手としての機能を持ちあわせていたとも考えられる。この時期になると東西の旧河道も埋まり、その上を水田耕作していたことが、鑿溝やプラントオパール分析の結果から確認できる。S D 40-60-74-75に切り合いはなく同時併存していたこと、流れがあったことを示す砂層のラミナー堆積の状況、合流・分岐点の抉れ方その他から考えると、北西から南東に水を流していたものと思われ、南部低湿地は溜池ではなく、水田として利用していたものと考えるが、プラントオパール分析の結果の検討を要する。

平安時代初頭、前時代の溝は埋まり、その上や東西の水田耕土の上にも、現行条里方向に沿う北北西を向く數10棟（同時併存は10棟以下と思われる）の掘立柱建物群が建てられる。その中には廓状の配置を示す建物群もある。平安時代前期まで、畦（道）は継続して利用される。水田耕作に伴うと思われる溝はその北縁に沿う S D 70他となるが、木樋は機能を失い、導水は畦（道）を横断する小溝によって行ったようである。

微高地を斜めに走る基幹水路は弥生時代中期から奈良時代にかけて、基幹水路として時代を超えて利用していることが認められる。断絶期をはさみながら、土地利用の原則には一貫したものを感じさせる。生産域を含む一単位集落の変遷過程を知るうえで興味深い遺跡であると同時に、川津郷、河津庄の一単位集落として巨視的にその変遷過程を考察すべき遺跡である。



第49図 川津一ノ又遺跡IV区出土遺物実測図

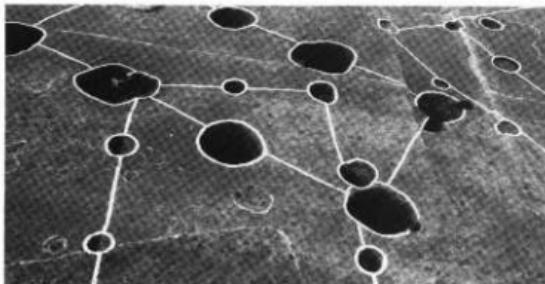


写真 81

S B 01

一つの柱穴の掘り方が、径、深さ共に80cmの大きさを持つ弥生時代中期頃の掘立柱建物である。



写真 82・83・84

S D 10

調査区北部を東西に横切るS D10より多量の牛馬の骨が出土した。中には牛の角の様な珍しい部位もあった。

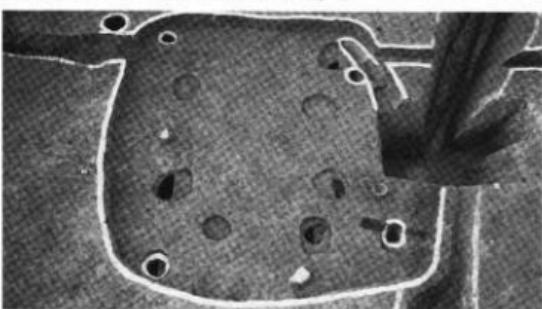


写真 85

S H 11

S D10と同じ時期の竪穴住居である。



写真 86
S H 09・10

円形の竪穴住居09の廃絶後に方形の10を建てている。

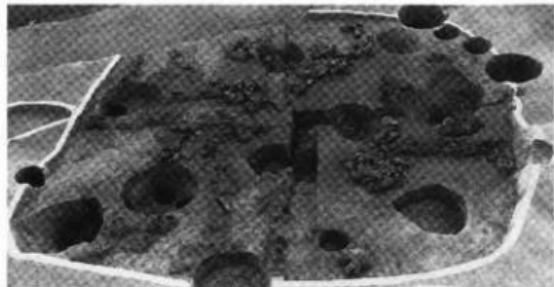


写真 87
S H 20

火災に遭って焼失した竪穴住居で、焼け木が多量に出土した。



写真 88・89
S D 30と竪穴住居群
S D 30は弥生後期の集落の環濠であるが、その廃絶後も数十年間集落は営まれ続けた。





写真 90
繩柱建物群
(SB 46・47・50)



写真 91
SB 49・51

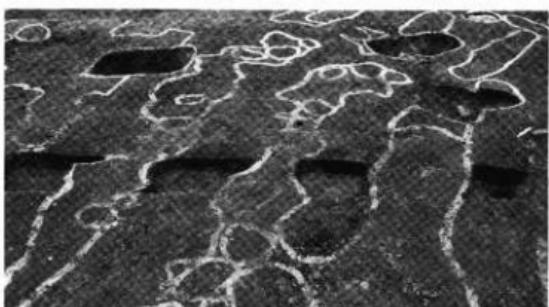


写真 92
跡跡
調査区東部は水田域であった。下川津遺跡で出土した様な草を牛にひかせていた可能性もある。

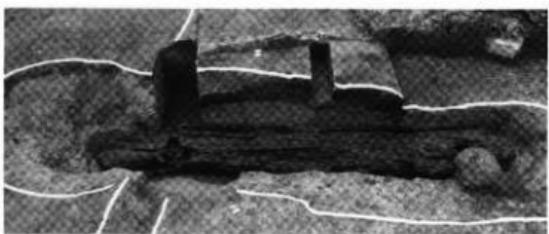
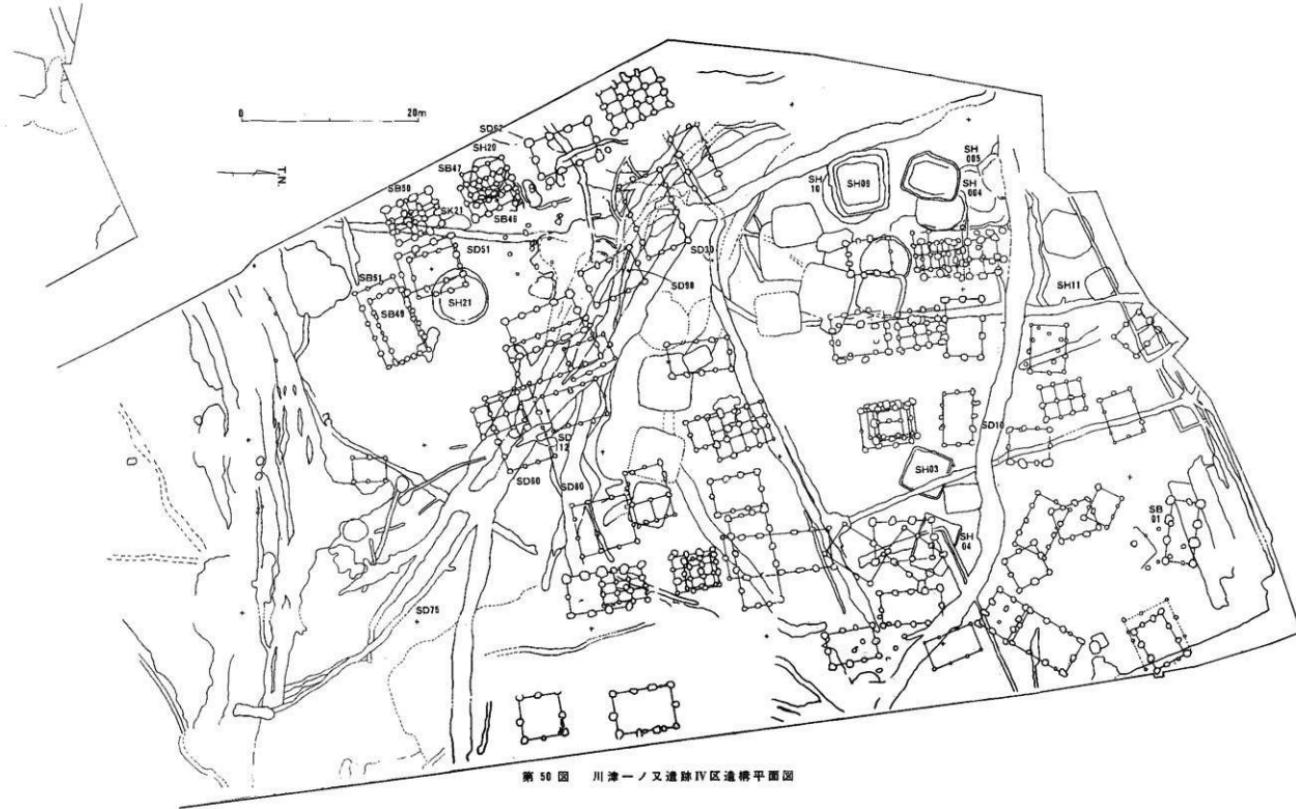


写真 93
木柵
畦（中央後方に高まりが見える）を切る形で柵に使用されたと考えられるような木製品が出土した。



第50図 川津一ノ又遺跡IV区造構平面図

13. 府中地区予備調査

(1) 調査の概要

坂出市・飯山町境の額坂峠から、横山（標高254m）・北麓・長吾山（標高152.1m）・鷺ノ山（標高322.4m）南麓を東西に抜けて綾南町境に至るルートの中で、主として尾根筋で遺構の有無を確認する予備調査を実施した。調査は、用地買収や立木の伐採、工事用道路の造成などの状況を確認した上で、平成2年9月25日から12月19日まで断続的に行った。掘削にあたっては、想定される遺構の内容や重機進入路の有無を考慮して人力・重機のいずれかで行った。

(2) 遺構・遺物について

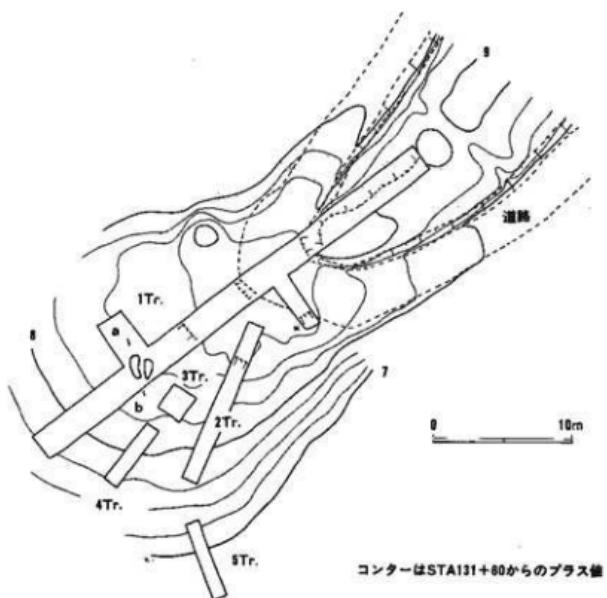
調査の結果、遺構を検出することができたのは、額中地区（その2）・横山地区（その2）・小原地区（その1）の3箇所であった。額中地区（その2）では溝状遺構が、横山地区（その2）では土坑2基が、小原地区（その1）ではピット7基がそれぞれ検出されたが、いずれも時期の判定できる遺物を伴っていない。また、周囲にはかの遺構が見られず、希薄な遺構分布を示している。一方、他の地区では後世の開墾などにより、遺構・遺物ともに全く検出されなかった。

(3) 小結

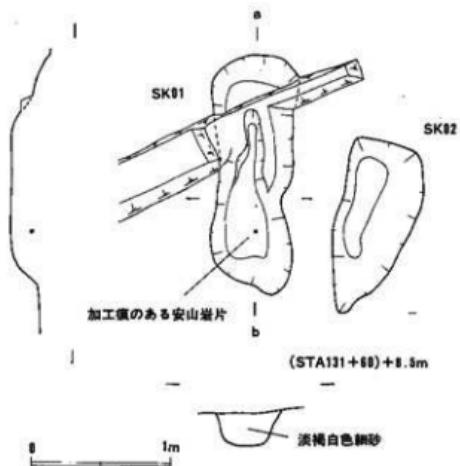
以上の結果から、付近に断続的な集落が展開した形跡は認められなことが判った。これは、從来から府中町南部の山間部に集落遺跡が知られていなかった状況と合致し、付近の積極的な土地利用が古代までは遡らないことを示唆している。

第51回 府中地区予備調査地点(1/25,000)

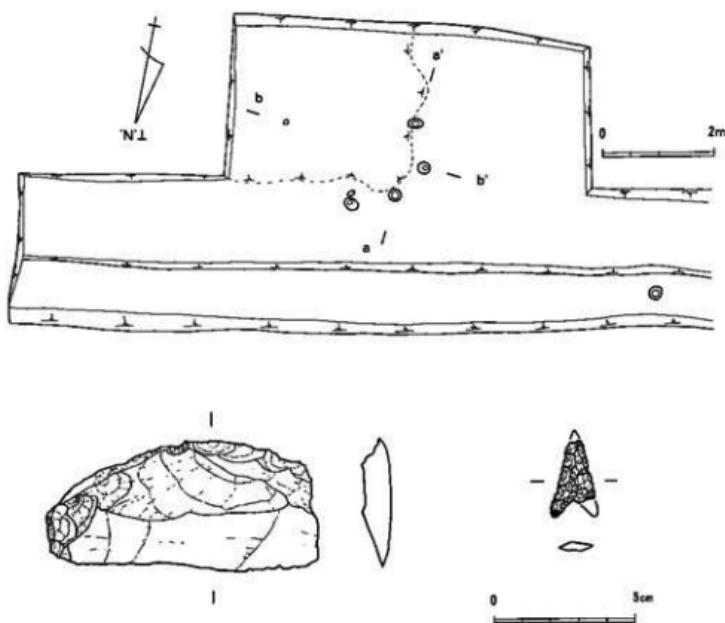




第 52 図 府中横山地区(その 2) トレンチ配置図



第 53 図 府中横山地区(その 2) 1 Tr. 挖出土坑実測図



第 54 図 府中小原地区(その 2) 検出ピット(上)と表探遺物(下)

14. 国分寺楠井遺跡

(1) 調査の概要

国分寺楠井遺跡は、高松市と国分寺町を両す堂山（標高302m）の西麓斜面に位置している。平成元年の予備調査により路線内での範囲を確定させ、平成2年4月11日から同年10月9日にかけて調査を実施した。調査面積は4400m²である。

調査は、尾根にはさまれた谷斜面については全面調査を行い、尾根稜線部や人工的な地形改変部についてはトレンチ調査を行った。その結果、中世の窯跡5基と同時期の建物跡や溝・墳墓が検出され、中世土器生産の実態を示す資料を提出することができた。

(2) 窯体の構造

調査区中での窯業関連遺構は、北東部と南西部で数基の窯跡と掘立柱建物（ピット）が近接して存在しており、中央部では検出できなかった。このような偏在した在り方から、窯跡と建物がセットになった支群（単位）の存在が想定される。

調査した5基の窯跡の内で、窯体が確認されたのは3基（S F01・02・04）であり、他は物原のみ検出された。以下に遺存状態の良好であったS F01とS F02の概要を記す。

S F01は、漏斗状の焼成部とその一端に開口する燃焼部をもつ、いわゆる「煙管窯」と呼ばれる形態の窯である。規模は、全長約1.9m、焼成部径約1.0m、同高約0.5mを測る。窯体は斜面を掘削して作られているため、床面がわずかに傾斜しており、第1次床面では焼成部と燃焼部との間に段差がある。焼成部窯壁は、上部ほど被熱しているが、赤色酸化層を形成している程度である。このことは、本窯が焼成段階で窯体内が密閉されることのない開放窯であることを示している。遺物は窯体内から土師質土釜・土鍋・甕が出土している。

S F02は、平面形が菱形に近い不整円形を呈する窯である。規模は長さ約1.1m、幅約0.85m、高さ約0.3mを測る。形態上、燃焼部と焼成部の区別は困難であるが、窯壁は顕著に被熱しており、表面が青灰色還元層を形成している。このことは、窯体内に崩落していた天井部の存在とともに、本窯が密閉窯であることを示している。窯壁は最大3枚認められ、少なくとも2回修復されていることが判った。なお窯体の構築にあたっては、先行する窯（S F04）を破壊・整地し、整地面のピークに掘られた2.5×1.8mの平面長方形の掘り形内に石を組み、その内側に粘土を貼って窯壁を作っていた。遺物は窯体内や物原から土師質土釜・土鍋・瓦質擂鉢などが出土している。

以上のようにS F01とS F02は、その形態や構築方法に著しい差異が認められる。そしてその差異は、焼成時に窯体を密閉するのか開放するのかといった焼成方法の違いから生じていると見られる。窯体構造や出土遺物より考えれば、S F01は土師質製品焼成窯として機能し、S F02は土師質製品と瓦質製品の焼成窯であった可能性が高いといえよう。

(3) 出土遺物

国分寺楠井遺跡の窯で生産された土器には、土釜・擂鉢・土鍋・甕・捏鉢があり、正確な数量比はとってないが、ほぼこの順に多いようである。これらの器種以外に、東播系須恵器捏鉢や備前焼甕・堺近郊産瓦質土器甕などがS F03物原から、備前焼四耳壺・瀬戸焼天目茶碗がS F02整地層から出土している。そしてこれら搬入品がいずれも14世紀後半から15世紀初頭にかけての時期にあたることから、楠井産の器種も同時期の所産と考えられる。

これらは、土釜・土鍋・甕が上師質焼成品であり、擂鉢・捏鉢が一部に上師質や須恵質を含むものの概ね瓦質焼成品であることから、器種により焼き分けが行われていたと考えられる。

また、楠井産土器を形態的な面から見ると、それ以前の在地系土器の流れを汲むもの（土釜・土鍋・捏鉢）と、従来の在地系土器とは異なるもの（擂鉢・甕）に分けることができる。後者の形態を他地域の土器・陶器と比較すると、同時期の備前焼に極めて良く似ていることが指摘できる。すなわち、楠井産捏鉢の外傾する面をもった口縁部や、甕の玉縁状口縁の特徴が備前焼と共通しており、備前焼の模倣形である可能性は高い。この他、「く」の字形に外反し端部に四面をもつ甕（第60図14）は、亀山焼模倣の可能性がある。

(4) 小結

今回の調査では、陶器（須恵器）窯に比べ從来不明な部分の多かった土器（上師質・瓦質）の生産地を特定できたり、その生産の具体相がかなり明らかにできた点に大きな意義を見出せる。以下に関連する問題点を2、3指摘し、まとめに代えたい。

[編年的位置付け]

楠井遺跡の年代を搬入品との共伴関係から14世紀後半から15世紀初頭に想定したが、土器の形態にはヴァリエーションが見られ、ことに土釜には鉢部の突出程度や口縁部の長短に著しい形態差が指摘できる。このため型式や層位毎の分析を通して、細年上の細分を行うべきなのか、それとも同時期の系列の差なのかを明らかにしていく必要がある。

[生産集団について]

検出された窯跡はいずれも極めて小規模であり、1回の操業での生産量はさほど多くはないことが予想される。また、一つの支群も狭い平坦地に貧弱な建物が付随するのみであって、大規模な工房は伴っていない。このような点から見れば、楠井における土器生産は集約的大規模生産の行われていた陶器窯のそれとはかなり異質なものであったと考えざるをえない。しかしその立地が一般の集落内ではないことや、窯を作り変えたり補修するなど継続的に操業していたと見られること、さらに一定の熟練が必要と思われる瓦質焼成が行われていたことなどから、楠井の工人が専業ないし半専業集団であったことも同時に推測されよう。

また、この生産集団に対し、庇護者としての支配階層が存在したのか否か、存在したとすればどのような階層が想定でき、どのような結合関係を有していたのか、今後の検討課題である。

[製品の流通]

現在、楠井産土器の流通状況を示す資料は極めて少ない。しかし、特徴的な形態をもつ擂鉢や甕の類例に接することで、その一端を示すことができる。

楠井遺跡の眼下に広がる国分寺平野においては、中世遺跡の調査がほとんど行われていないため不明であるが、周辺地域では坂出市讃岐国府跡・下川津遺跡・川津川西遺跡などで楠井産擂鉢や甕の可能性をもつものが見られる。これらの資料は、胎土分析など科学的手法と併せて楠井産か否かの判断が必要であり、にわかに断定はできないが、肉眼観察による限り非常に近似した胎土をもっている。このことから、楠井産土器が旧阿野郡のみでなく近隣の郡にも広く流通していた可能性を考えられよう。14世紀後半から15世紀初頭の讃岐では、東播系捏鉢の流通量が減少し始め、代わって備前擂鉢が次第に増加するが、その流通状況は地域によりかなり不均衡なものであった。楠井産擂鉢は、この不安定な備前擂鉢の流通を補完するために、瓦質焼成による安価な模倣品として出現したといえるのではないだろうか。甕についても同様な事情が考えられる。したがって、備前陶器が安定的に供給される15世紀前半代以降は楠井産擂鉢・甕は淘汰され、生産も廃絶すると理解できるのである。



写真 94 調査区北東部全景(矢印 S F 01)



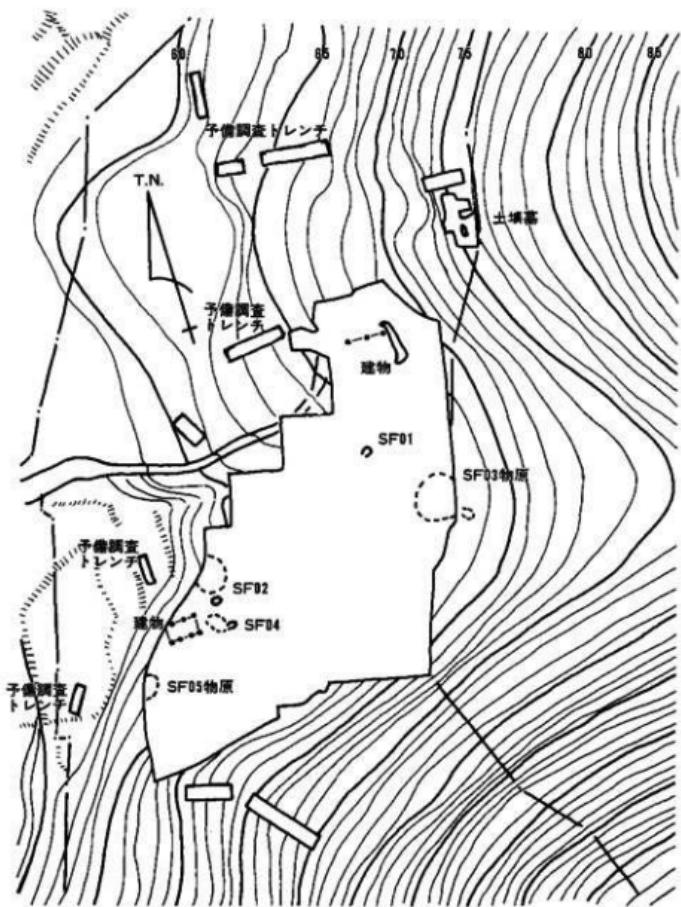
第 55 図 遺跡周辺地形図



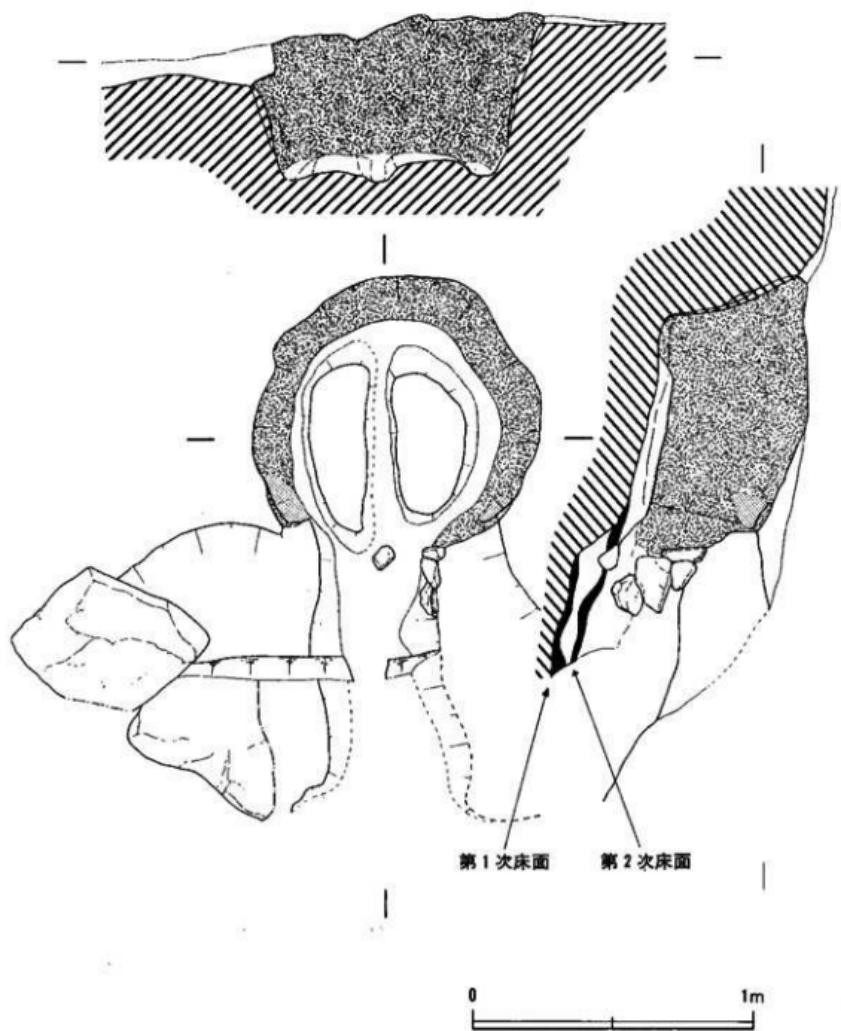
写 真 95 作業風景



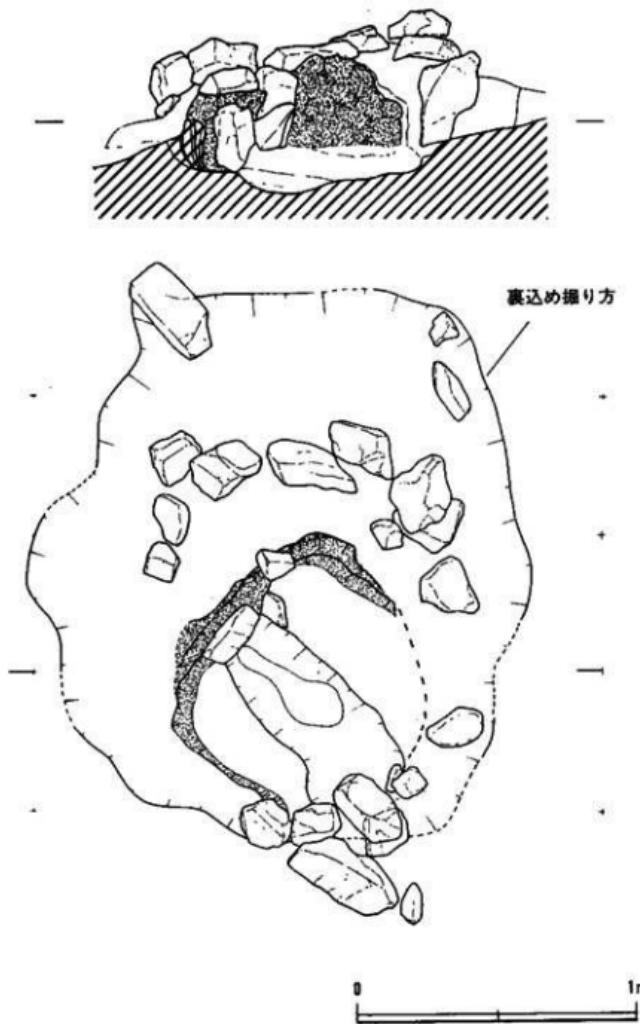
写 真 96 S E 03 物原遺物出土状況



第 56 図 造構配置略図
(破線は物原の範囲)



● 窟壁
 ■ 補修窓壁
 ■■■ 灰層
 第57図 SF01窓体



第 58 図 SF 82 墓体



写真 87
S F 01 窟体内遺物出土状況



写真 88 S F 01 窟体完掘状況



写真 89
S F 01 窟体断ち割り状況



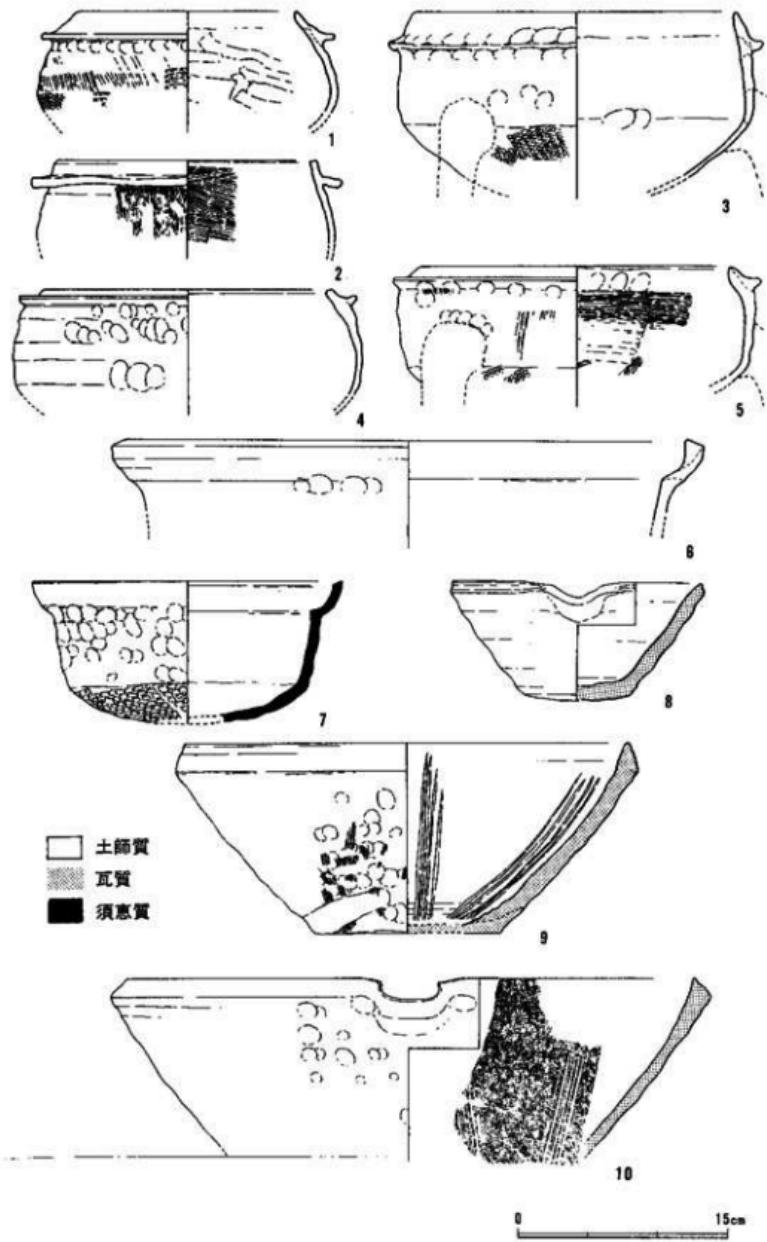
写真100 SF 02天井部崩落状況



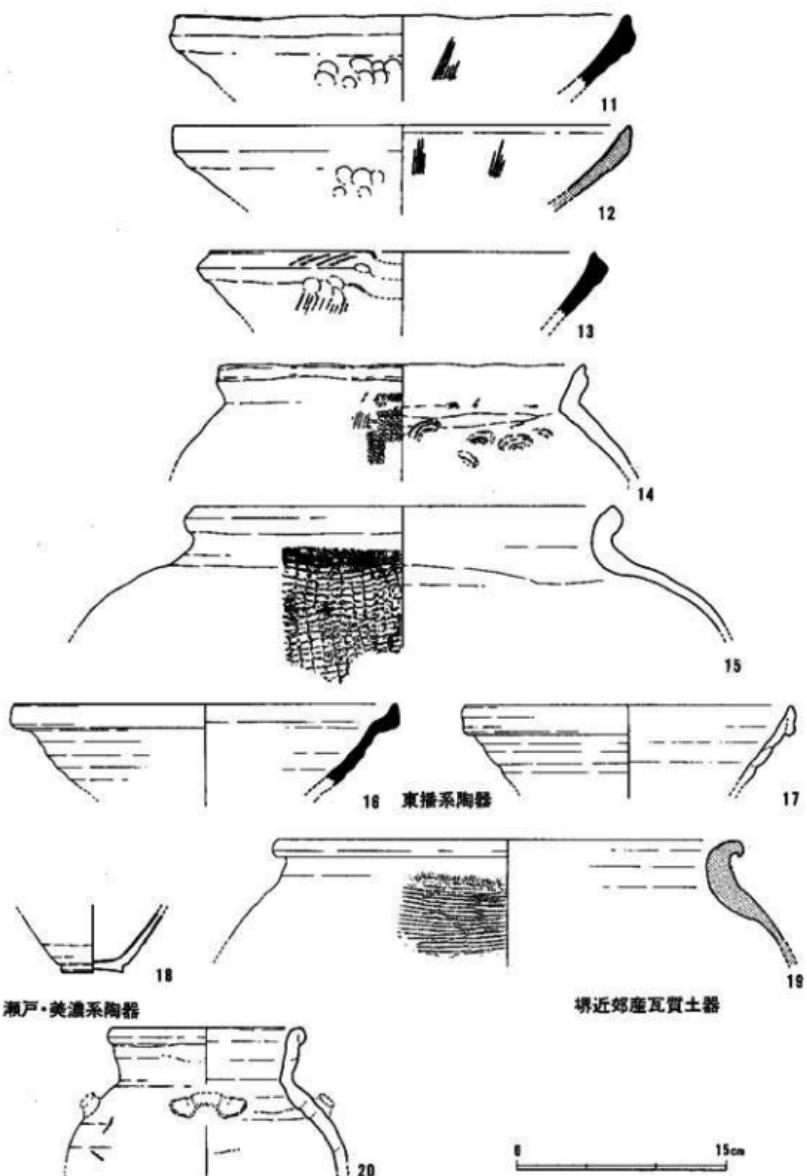
写真101
SF 02窯体内遺物出土状況



写真102 SF 02窯体完掘状況

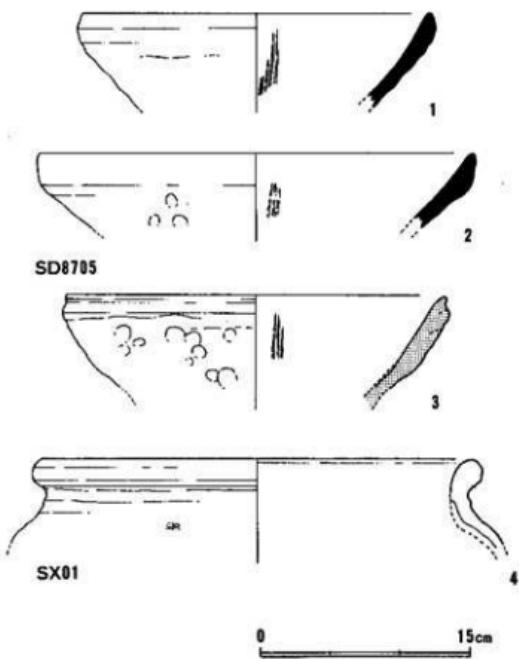


第59図 楠井遺跡出土土器(1)



第 68 図 楠井遺跡出土土器(2)

備前焼



第 61 図 諸岐國府跡出土土器
(楠井産の可能性がある)

15. 中間西井坪遺跡

立地と環境 本遺跡は高松平野西部の本津川支流域に位置する。堂山山塊北部の六つ目山北東麓にあって、前面には石清尾山・五色台に挟まれた本津川、香東川下流域平野が広がる。

今年度調査区は六つ目山中腹に発する小谷によって刻まれた標高36~38mの台形状の丘陵部にある。因に弥生時代後期~近世の集落域を確認した昨年度調査区は埋没小谷3条を隔てた東側に位置して2~3m程度低く、その部分までは旧香川郡条里に関する方格地割が及ぶ。

北西約500mには全長30mの小形前方後円墳、御殿天神社古墳があり、土師質陶棺を出土した5世紀前半の全長71mの前方後円墳、今剛古墳は北方約4kmの勝賀山東麓に位置する。また南方の堂山東麓には西山崎古墳群、埴輪棺の知られる本堺寺裏山古墳群などがある。

調査概況 今年度調査では以下4点を確認した。①AT火山灰層と上位旧石器群、②埴輪焼成土坑および関連堅穴住居、③前方後円墳を含む3基の前期古墳、④中世後半の集落域

昨年度調査区とは地形的に隔たるばかりではなく、遺跡内容の点についても差異が大きい。

旧石器 対象地丘陵部の広範囲(1b・3a・3b・5区)に分布する。西北部3a区の大部分では石器群より下位に若干の間層を挟んで5~10cmのAT火山灰層を認める。(写真106)

3a区で4群以上、1b・3b・5区でそれぞれ1群以上の旧石器ブロックを検出している。全体として二次的移動の少ない石器資料と考えられる。

小形ナイフ形石器、舟底形石器を主体とし、出土総数は8000点弱を数える。(第6表)ナイフ形石器は全て横長剣片を素材とするが、其伴する石核に典型的な翼状剣片は見当らない。また圧倒的多数はサヌカイトを素材とするが、5区で黒曜石製縦長剣片1点、1b・3b区でナイフ形石器・石核を含む計3点のチャート製品を確認している。



第82図 遺跡周辺地形図

	器種	1b区	3a区	3b区	計
サ	石核	7	38	10	55
ヌ	ナイフ	28	64	3	95
カ	舟底	7	88	1	96
イ	スクレイパー	2	8	3	13
ト	尖頭器	0	7	0	7
製	ハンマー	14	7	2	23
チャ	石核	0	0	1	1
ト製	ナイフ	2	0	0	2
	剝片他	3	1	2	6

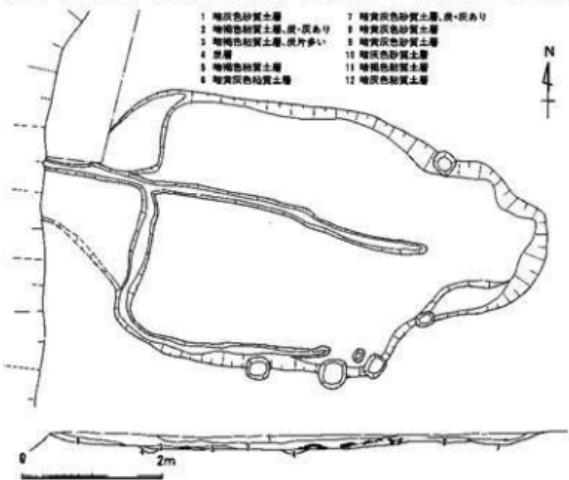
第6表 出土旧石器仮集計表 (1991.3.20現在)
* 5区は未集計

埴輪焼成土坑 3a区西端を谷部に面して立地する。平面が不整五角形を呈し、長さ7.5m、幅3.8m、深さ0.2mを測る。床面長軸上と南辺に沿って並行し、西端で合流して谷部に延びる排水溝を備える。床面はほぼ水平である。壁体・床に加熱による明瞭な硬化・変色は認め難いが、排水溝・床面直上に多量の炭が堆積する。天井部を伴う形跡は一切無い。密閉式の窯構造ではなく、いわゆる「野焼き」方式の施設で須恵器窯の影響は受けていないと考える。

土師質陶棺蓋材、衣蓋形・壺形埴輪等が伴う。また本土坑に伴う谷部の廃棄土器群は円筒埴輪、不明形象埴輪、土師器類等多数からなる。これらの資料から本焼成土坑は4世紀末～5世紀初頭に位置付け得る。

第65図は陶棺蓋材。断面三角形の屋根形を呈し、外表面には幅広の粘土帯を格子状に貼る。棺身との接着面を幅広に作り出すために側部端は特徴的な形態を持つ。内面には剥落しているが、今岡古墳資料同様、型持たせの補強材を貼付する。第67図2、4は壺形埴輪と衣蓋形埴輪である。第66図3は谷部廃棄土器群出土の円筒埴輪。断面台形だが突出度の高い突帯を持ち、長方形透かし孔で一次調整縫ハケを横ナデで消す。第67図1は異形形象埴輪。広口壺口頭部状のものを縦に半裁した形態。3は突出度の低い断面三角形突帯、円形透かし孔で一次調整縫ハケのみ。形象埴輪脚部かも知れない。第67図5は廃棄土器群、6と第66図4、5は谷部出土の土師器類。布留式の新しい階段の資料であろう。上述の埴輪類に伴う。

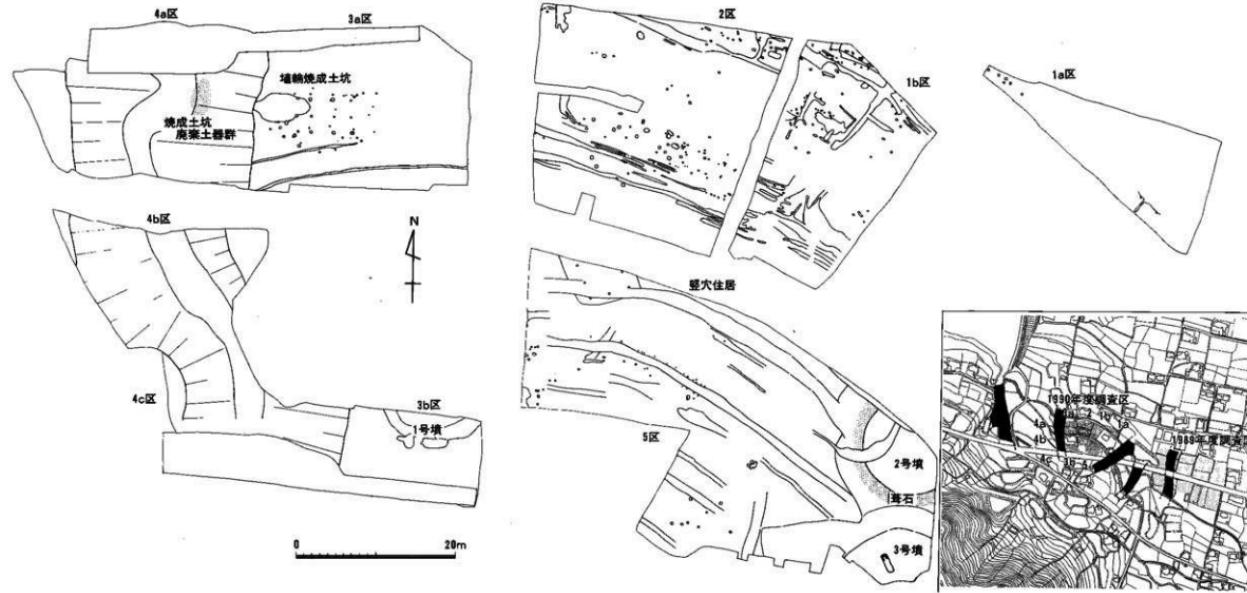
大形堅穴住居 5区西北部、埴輪焼成土坑の東方約30mに位置する。一辺約8.2mの堅穴住居で2×2間配置の主柱穴を持つ。破碎した土師質陶棺、円筒埴輪、盾形等の形象埴輪、土師器類を大量に検出した。立地、建物規模、伴出遺物から埴輪焼成土坑に所属する工房あるいは倉庫など



第63図 3a区 墓輪焼成土坑

関連施設と推定できる。伴出遺物から4世紀末～5世紀初頭に位置付け得る。

写真103は出土陶管材。蓋材は断面半円形で外表面に平行線と山形線を組み合わせた文様を粘土帯で構成する。棺身は空心の箱形材を組み合わせる。今岡古墳資料に酷似した形態を想定できる。



第 84 図 中間西井坪遺跡 1980 年度調査区造構配置図

古墳群 いずれも著しい削平を被り、周溝と墳丘基底部を残すにすぎない。1号墳は円墳で南半部のみを確認した。周溝南端部に陵端部がある。周溝より土師器各種を確認したが、埴輪は伴わない。2号墳は現段階では墳形不明。周溝南部は3号墳に切られる。墳丘基底部の盛土層若干が残存する。墳裾部には拳一人頭大の角礫を用いた粗雑な葺石が残存する。単純な広口形態を持つ壺形埴輪や鉄錆2点等を葺石周辺より検出した。3号墳は東西主軸の前方後円墳で北側1/3弱を確認している。後円部北半で從属主体部と考えられる箱式石棺の一部を確認した。赤色顔料を塗布した穀床を認め、副葬品は未確認である。周溝から円筒埴輪・船形埴輪等を出土した。

第66図1は3号墳出土の円筒埴輪。突出度の高い断面方形の突帯、長方形透かし孔、二次調整縦ハケを持つ。本例を始め同古墳出土の円筒埴輪の多くはいわゆる「雲母土器」同様の角閃石細片を多量に含む胎土である。因に埴輪焼成土坑および関連遺構より出土した埴輪類はこれとは全

名称	区	墳 形	規 模	埋葬施設	外表施設	出 土 遺 物
1号墳	3b	円 墳	径12~16m	?	周 溝	土 師 器
2号墳	5	?	?	?	周溝 補石	埴輪 鉄錆
3号墳	5	前方後円墳	長20~25m	(従) 箱式石棺	周 溝	円筒・船形埴輪他

第7表 古墳要素表

く異なる胎土を用いている。
焼成土坑・大形竪穴住居に
関わる円筒埴輪よりも古い
様相を持つ。2は3号墳出
土の船形埴輪。前後端を欠
損して1/3弱が残存する。

中世遺構群 1b・2・3a区を中心に展開する。比較的小規模な獨立柱建物と小溝群を確認した。諸遺構はほぼ地形に合致した方向を持つ。当該地点にいわゆる条里地割の影響は及ばない。柱穴群の分布等から小規模な宅地群の点在する集落景観を想定しうる。伴出資料の高台付椀形態の欠如、羽蓋等の煮沸形態から14~15世紀の遺構群と推定できる。

まとめ 旧石器資料では火山灰層との関係が明瞭な旧石器資料を得ることが出来た。またそれが從来当地方では必ずしも様相が明らかではなかった舟底形石器を主体とする資料群であることも重要である。更にブロックとして把握しうることから該期の石器製作工程・集団構成復元にまで寄与する部分が大きいであろう。

埴輪焼成土坑は4世紀末~5世紀初に遡る最古段階の資料で構造上、須恵器窯の影響を受けていない点で注目できる。昨年度隣接地点で同時期集落の一部を確認しているので埴輪製作集団の存在形態にまで迫りうる資料である。なお今年度確認した古墳群は本遺跡の埴輪生産施設に先行し、伴出した円筒埴輪は別地域で生産された可能性が極めて高い。

また焼成土坑と竪穴住居から出土した土師質陶棺は今岡古墳・首取山遺跡例と共に古墳時代前期に遡る特異な資料である。古墳時代後期に吉備・畿内周辺などで盛行する土師質陶棺とは全く異なる構造・形態を持つ。おそらく形態・文様構成・構造から見て該期の割抜石棺・長持式石棺に関連すると思われる。それが高松平野西部木津川支流域の極めて限定した地域にのみ認められる点は注意すべきである。

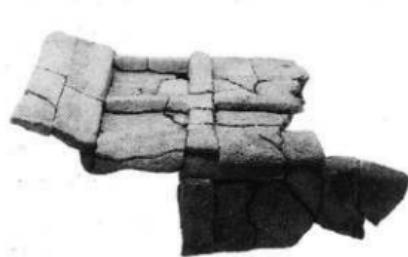
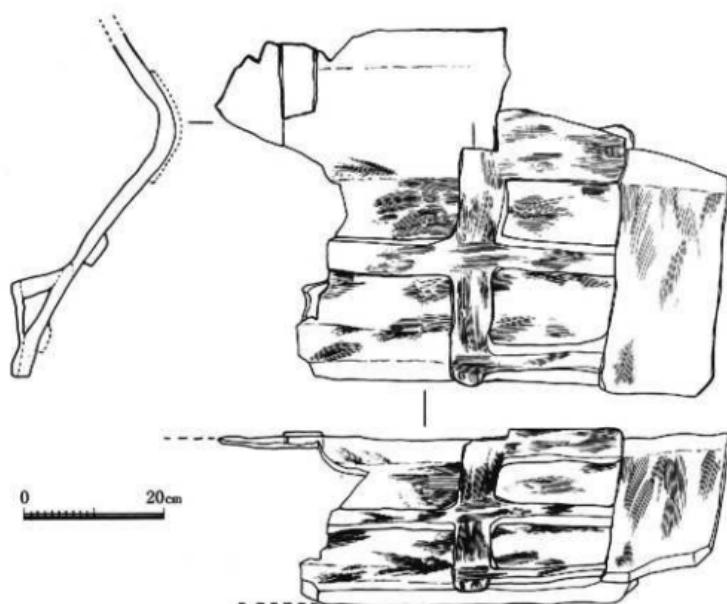


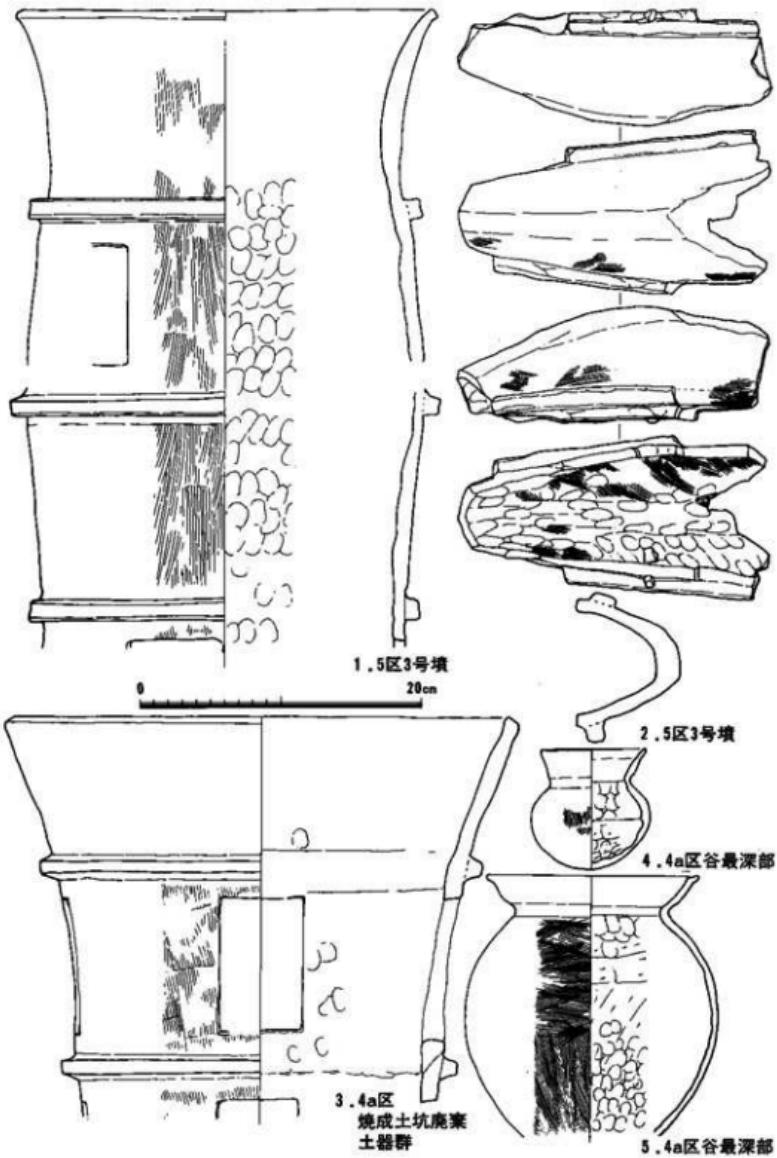
写真103 墓輪焼成土坑出土陶棺



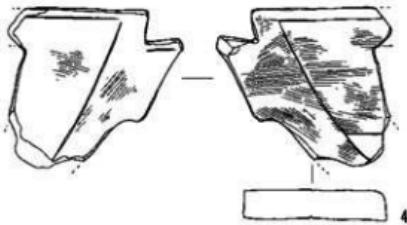
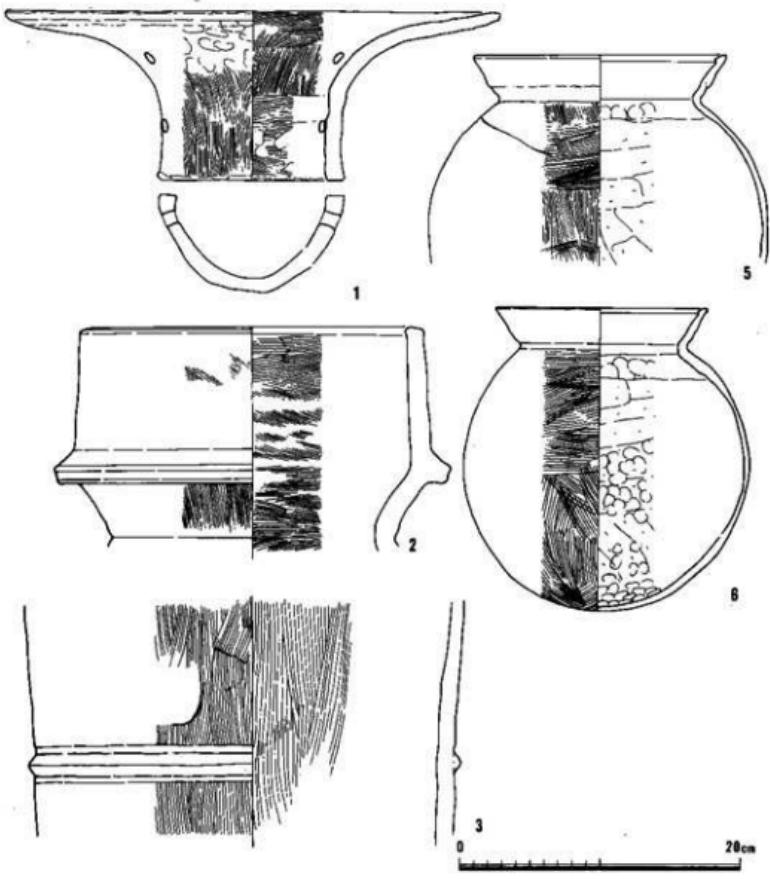
写真104 円筒埴輪(左:4a区 右:3号墳)



第65図 出土遺物実測図1



第66図 出土遺物実測図2



2·4 3a区墙绘烧成土坑
1·3·5 4a区烧成土坑陶器群
6 4b区谷最深部

第 67 図 出土遺物実測図 3



写真105 3a区 旧石器出土状況（東から）



写真106 3a区 土層堆積状況

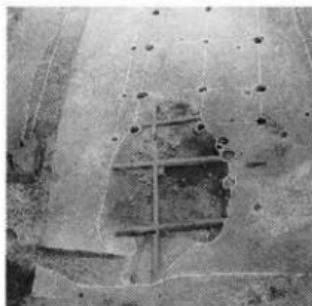


写真107 墓輪焼成土坑（後方建物・溝は中世後半）



写真108 3b区 1号墳(前面は旧石器出土状況)



写真109 3b区 1号墳(前面は旧石器出土状況)



写真110 5区 2号墳全景(手前は3号墳)



写真111 5区 大形竪穴住居陶棺等出土
状況



写真112 竪穴住居出土石形埴輪



写真113 竪穴住居出土陶棺片



写真114 3a区出土旧石器(表面)

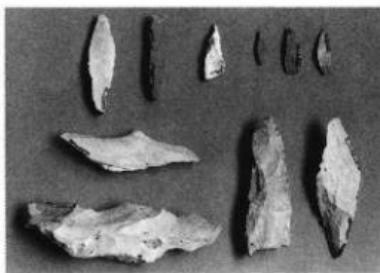


写真115 3a区出土旧石器(裏面)

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報

平成2年度

平成3年8月31日

編集 (財) 香川県埋蔵文化財調査センター

発行 香川県教育委員会
(財) 香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団高松建設局

印刷 新日本印刷株式会社